

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K18591

研究課題名(和文)セクシュアル・マイノリティにおける高齢期の施設ケア及び老後の不安に関する調査研究

研究課題名(英文)Anxiety for the life after retirement and the elderly institutional care among sexual minority adults in Japan.

研究代表者

河野 禎之(Kawano, Yoshiyuki)

筑波大学・人間系・助教

研究者番号：70624667

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,900,000円

研究成果の概要(和文)：性的マイノリティにおける高齢期の施設ケアや老後不安に関連して、看護師・介護従事者400名、一般成人200名を対象に調査を実施した結果、LGBT等に関するイメージや知識は一般成人に比べて著しい違いはないものの、研修の機会が十分でないことや誤解や偏見を有する層が存在すること等が示された。また、当事者が抱える老後不安について年代別・セクシュアリティ別に16名のインタビュー調査を実施した結果、経済や住居等の課題のほか、同性婚ができないためパートナーとの婚姻関係がないことや、周囲に参考となるロールモデルがないこと、偏見や差別なく在宅や施設でケアを受けられるかといった不安を抱えていること等が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

性的マイノリティを巡る課題に関する関心は近年高まっているが、これまで老年期の課題について取り扱った研究は特に本邦では極めて限定的であった。本研究は、施設ケアに代表される老年期の医療や介護等のケアを担う側である看護師や介護従事者に対する調査にくわえ、性的マイノリティ当事者の側にもインタビュー調査を行うことにより、ケアを担う側と受ける側の双方の視点を有した知見を得ることができた。今後、より詳細な分析を実施していくなかで、イメージや知識に関する尺度を公表して広く学術使用できるよう準備を進めるとともに、インタビュー結果をもとに大規模な調査を実施するなど、さらに学術的・社会的意義を高める予定である。

研究成果の概要(英文)：We conducted two surveys of 400 nurses and carers and 200 adults about their perceptions and knowledge of gender and sexual minorities as a related issue to institutional care and concerns in old age. The results of the surveys indicated that although there were no significant differences in their perceptions and knowledge of gender and sexual minorities compared to the general adult population, there were some groups that lacked sufficient training opportunities and had misunderstandings and prejudices. In addition, interviews were conducted with 16 gender and sexual minorities by age and gender and sexuality on their concerns about older age. The interviews revealed that in addition to financial and housing issues, they were concerned about the vulnerability of their partners' relationships due to the lack of a same-sex marriage system, the lack of role models around them, and whether they would be able to receive care at home or in institutions without prejudice or discrimination.

研究分野：臨床心理学

キーワード：LGBTQ 性的マイノリティ ジェンダー セクシュアリティ 知識 イメージ 施設ケア 老後不安

1. 研究開始当初の背景

近年、2015年に渋谷区での同性パートナーシップ制度が開始されたこと等に代表されるように、LGBTQ等に代表される性的マイノリティ(以下、LGBTQ当事者)の存在が急速に可視化されている。それに伴い、LGBTQ当事者を巡る生活のさまざまな領域での課題も焦点が当てられつつある。その一つとして、LGBTQ当事者の高齢期の問題が挙げられる。海外では、たとえば米国では2015年に明確にヘルスケアにおけるLGBTQ等に対する差別を解消することが不可欠であることが学術団体(American Geriatric Society)より示されているように、LGBTQ当事者の高齢期のケアの問題に対する取組が進められている。しかし、日本においてはLGBTQ当事者を巡る課題が可視化され始めた段階にあり、高齢期の問題に関する知見はほとんどみられない。そのため、LGBTQ当事者の老後の問題や、特に施設というより生活に密着した場面におけるケアの問題について学術的な知見はない状況にある。

人口の7~8%とも見積もられるLGBTQ当事者に対する高齢期の支援体制の構築は喫緊の課題である。カミングアウトが社会的に認知され始めた現在、男女二元論的な前提に立った福祉・介護制度や施設ケアと、当事者のニーズとの摩擦が増加することは明らかである。たとえば当事者が老後に対して、ありのままの自分とともに老後を過ごすパートナーや家族ができるのか、パートナーや家族と老後を過ごせない場合は特に介護が必要となった際に自分を受け入れてくれる施設があるのか等の不安を抱えている場合は少なくない。誰もが安心して老後/高齢期を過ごせる社会に資する研究を早急に立ち上げる必要がある。

2. 研究の目的

上記を踏まえ、本研究ではLGBTQ当事者を巡る(1)高齢期の施設ケアでの課題と(2)LGBTQ当事者の抱える将来の老後不安について明らかにすることを目的とした。

具体的には、(1)高齢期の施設ケアでの課題について、先行研究のレビュー等により、前提としてケア提供者側が有するLGBTQ当事者へのイメージや知識等の現状を明らかにすることの必要性が示唆された。そのため、本研究では高齢者ケアの主たる担い手である看護師と介護従事者(介護福祉士等)が有するLGBTQ等へのイメージや知識を測定する尺度を開発、調査を実施し、一般成人のデータとの比較により現状を明らかにすることを目的とした。くわえて、LGBTQ当事者へのインタビュー調査により施設ケアに関する不安や期待について質的に明らかにすることを目的とした。

(2)LGBTQ当事者の抱える将来の老後不安については、LGBTQ当事者へのインタビュー調査により老後に関する不安や期待について質的に明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) LGBTQ当事者における高齢期の施設ケアの課題に関する調査研究

高齢期の施設ケアの課題に関して、その前提となるケア提供者側が有するLGBTQ当事者へのイメージや知識等の現状を明らかにするため、以下の調査を実施した。

LGBTQ当事者に関するイメージ測定尺度の開発と調査

調査対象は、Web調査会社に登録されている看護師200名、介護従事者(介護福祉士、介護職員初任者研修/ホームヘルパー2級、ケアマネジャー)200名、一般成人200名の合計600名とした。

調査参加者に対して、基本属性項目のほか、先行研究等をもとに専門家パネルにて開発したLGBTQに関するイメージ尺度項目(SD法による20項目から構成され、レズビアン、ゲイ、トランスジェンダー男性、トランスジェンダー女性、バイセクシュアル男性、バイセクシュアル女性それぞれを想定して回答を求めると、LGBTQに関する教育や経験、当事者との接触等に関する項目、ホモフォビア項目、トランスフォビア項目への回答を求めた。

分析について、看護師、介護従事者、一般成人それぞれにおいて、各項目の記述統計によりその特徴を分析した。また、イメージ尺度の項目精選(I-T相関や主成分分析等による)の後、再検査法や内の一貫性の確認による信頼性の検証と、ホモフォビア項目及びトランスフォビア項目、LGBTQ等に関する研修の受講の経験等との相関分析による収束的妥当性の検証を行った。くわえて、最終的なイメージ尺度に基づく得点に関する3群比較(一般成人を基準として看護師や介護従事者の比較)を行った。

LGBTQやジェンダー、セクシュアリティに関する知識尺度の開発と調査

調査対象は、Web調査会社に登録されている看護師236名、介護従事者(介護福祉士、介護職員初任者研修/ホームヘルパー2級、ケアマネジャー)229名、一般成人229名の合計694名とした(ただし、の調査とは異なる対象者)。

調査参加者に対して、基本属性項目のほか、先行研究等をもとに専門家パネルにて開発したLGBTQやジェンダー、セクシュアリティに関する知識尺度項目(207項目)と、LGBTQに関

する教育や経験、当事者との接触等に関する項目、ホモフォビア項目、トランスフォビア項目への回答を求めた。

分析について、看護師、介護従事者、一般成人それぞれにおいて、各項目の記述統計によりその特徴を分析した。また、知識尺度の項目精選（I-T 相関や G-P 分析等による）を行った。

LGBTQ 当事者へのインタビュー調査

調査対象は、40 代、50 代、60 代以上の年齢区分毎に、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー男性、トランスジェンダー女性、これら以外のジェンダー/セクシュアリティの LGBTQ 当事者とした。調査参加者の募集は、LGBTQ 当事者団体及び支援団体を通じて実施した。参加の意思表示があった者に対して、調査の目的や倫理的配慮等を説明のうえ、最終的に書面にて同意の得られた者を調査参加者とし、16 名のインタビュー調査のデータを分析対象とした。

調査参加者に対して、「老後について(どのような老後を過ごしたいか/老後に不安を感じるか/希望する老後を過ごすためには何が必要か)」「介護について(介護が必要となった時はどのようなことを希望するか/介護に不安を感じるか/どのようなことが満たされれば介護を受けようと思えるか)」「施設入所について(施設に入所することが必要となった時はどのようなことを希望するか/施設に入所することに不安を感じるか/どのようなことが満たされれば施設に入所しようと思えるか)」について質問を行い、回答を得た。

分析について、最初に 16 名のインタビュー調査の音声データをテキストデータ化し、逐語録を作成した。次に逐語録をもとに発言内容を意味のある単位に要約し、その内容をもとにコード化を行った。続いて、コード名や要約内容をもとにサブカテゴリを生成し、最終的にサブカテゴリをもとにカテゴリを生成した。これらをもとに、老後や施設ケアに対して LGBTQ 当事者が抱える不安や期待に関わる重要な構成要素を分析した。

なお、これらの調査は筑波大学人間系研究倫理委員会東京地区委員会の承認を得て実施した(東 22-100 号)。

4. 研究成果

(1) LGBTQ 当事者における高齢期の施設ケアの課題に関する調査研究

LGBTQ 当事者に関するイメージ測定尺度の開発と調査

調査対象は、Web 調査会社に登録されている看護師 200 名、介護従事者(介護福祉士、介護職員初任者研修/ホームヘルパー 2 級、ケアマネジャー) 200 名、一般成人 200 名の合計 600 名のうち、看護師及び介護従事者については普段の臨床場面で高齢期の対象者(患者や利用者)を主とする者に限定して分析対象とした。その結果、最終的に看護師 151 名(男性 18 名、女性 133 名、平均年齢 41.6 ± 11.2 歳)、介護従事者 181 名(男性 102 名、女性 77 名、平均年齢 47.2 ± 9.7 歳)、一般成人 200 名(男性 119 名、女性 79 名、平均年齢 46.7 ± 11.3 歳)が分析対象となった。

先行研究等をもとに専門家パネルにて開発した LGBTQ に関するイメージ尺度 20 項目について、レズビアン、ゲイ、トランスジェンダー男性、トランスジェンダー女性、バイセクシュアル男性、バイセクシュアル女性それぞれを想定して求めた回答について、I-T 相関、G-P 分析、Cronbach の係数による項目精選後に主成分分析を実施した結果、15 項目が最終的な尺度項目として採択された。これらの 15 項目の尺度得点について、暫定的な信頼性及び妥当性の検証を行ったところ、内的整合性や再検査法により一定の信頼性及び妥当性が確認された。また、イメージ尺度に基づく得点に関する 3 群比較(一般成人を基準として看護師や介護従事者の比較)を行ったところ、看護師及び介護従事者ともに今回のサンプルにおける一般成人との比較において有意差は示されなかった。

これらのことから、本研究で開発した LGBTQ 当事者に関するイメージ測定尺度は一定の信頼性及び妥当性を有すること、LGBTQ 当事者に関するイメージは看護師及び介護従事者において一般成人と比較して大きな偏りはないと考えられることが示された。

LGBTQ やジェンダー、セクシュアリティに関する知識尺度の開発と調査

調査対象は、Web 調査会社に登録されている看護師 236 名、介護従事者(介護福祉士、介護職員初任者研修/ホームヘルパー 2 級、ケアマネジャー) 229 名、一般成人 229 名の合計 694 名のうち、看護師及び介護従事者については普段の臨床場面で高齢期の対象者(患者や利用者)を主とする者に限定して分析対象とした。その結果、最終的に看護師 179 名(男性 20 名、女性 159 名、平均年齢 43.4 ± 10.2 歳)、介護従事者 206 名(男性 84 名、女性 121 名、その他の回答 1 名、平均年齢 48.2 ± 11.2 歳)、一般成人 229 名(男性 104 名、女性 125 名、平均年齢 49.3 ± 13.8 歳)が分析対象となった。

先行研究等をもとに専門家パネルにて開発した LGBTQ やジェンダー、セクシュアリティに関する知識尺度項目 207 項目について、I-T 相関、G-P 分析による項目精選を行った。その結果、暫定的に 150 項目まで項目を縮減し、これらの項目から適宜難易度を設定した質問項目を複数パターン抽出するためのアイテムプールを作成した。

LGBTQ 当事者へのインタビュー調査

調査対象は、年齢区分及び多様なジェンダー／セクシュアリティの LGBTQ 当事者を募集し、最終的に 40 代はレズビアン 1 名、ゲイ 1 名、バイセクシュアル 1 名、トランスジェンダー男性 1 名、トランスジェンダー女性 1 名、これら以外のジェンダー／セクシュアリティ 2 名、50 代はレズビアン 1 名、ゲイ 1 名、バイセクシュアル 1 名、トランスジェンダー男性 1 名、トランスジェンダー女性 2 名、これら以外のジェンダー／セクシュアリティ 1 名、60 代はレズビアン 1 名、ゲイ 1 名の合計 16 名から研究協力が得られ、そのインタビューデータを分析対象とした。

インタビューデータの分析に関して、「老後について」は、たとえば「仲の良い人と一緒に過ごしたい」「パートナーと楽しく過ごしたい」等の声が聞かれたほか、「老後についてイメージができない」「目の前のことに集中している」等の声も寄せられた。同様に「介護について」や「施設入所について」についても、「イメージがつかない」「考えるのが難しい」等の声が共通して聞かれていた。また、これまでの経験の中での死生観に基づく発言と考えられるものもみられ（「長生きすることにはこだわらない」等）、マイノリティ当事者としてのこれまでの人生での経験が老後や介護等への期待や不安に関係しうることも示唆された。くわえて経済や住居等の課題のほか、同性婚ができないためパートナーとの婚姻関係がないことや、周囲に参考となるロールモデルがないこと、偏見や差別なく在宅や施設でケアを受けられるかといった不安を抱えていること等もうかがえた。

今後、それぞれの調査結果をより詳細に分析するとともに、それらを横断的に分析し、誰もが安心して老後／高齢期を過ごすことができる社会の実現に向け、具体的な課題の同定とその解決に資する成果を発信していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高屋敷(堀内) 明由美・河野禎之	4. 巻 54
2. 論文標題 筑波大学における学生への配慮の取り組み紹介	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 医学教育	6. 最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11307/mededjapan.54.1_45	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 河野禎之	4. 巻 2
2. 論文標題 D&Iの実現とその先に向けた学びを 筑波大学インクルーシブ・リーダーズ・カレッジの取り組み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月間経団連	6. 最初と最後の頁 24-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 河野禎之	4. 巻 32(5)
2. 論文標題 セクシュアル・マイノリティ概論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 老年精神医学雑誌	6. 最初と最後の頁 505-511
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 河野禎之	4. 巻 34(4)
2. 論文標題 筑波大学におけるLGBT等に関する取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ストレス科学	6. 最初と最後の頁 261-268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野禎之	4. 巻 54
2. 論文標題 性の多様性を知る～「LGBT」とは何か～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 作業療法ジャーナル	6. 最初と最後の頁 54-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野禎之	4. 巻 176
2. 論文標題 大学におけるLGBT等に関する取り組みの実際	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心と社会	6. 最初と最後の頁 121-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野禎之	4. 巻 55
2. 論文標題 筑波大学におけるLGBT等に関する取組～基本理念と対応ガイドライン策定の経緯とねらい～	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 100-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 5件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 河野禎之
2. 発表標題 大学でのSOGI学生支援の現状と課題解決に向けて 筑波大学を例に
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河野 禎之
2. 発表標題 インクルーシブ社会を実現するための人材開発：グローバル・ダイバーシティ・コンピテンスを考える
3. 学会等名 Tsukuba Global Science Week 2022 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河野 禎之
2. 発表標題 多様な老いを見つめる Diversity, Equity and Inclusionの観点から
3. 学会等名 日本老年社会学会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河野 禎之
2. 発表標題 インクルーシブ社会を実現するための人材開発：ポスト・コロナ時代に大学が果たせる役割とは
3. 学会等名 筑波会議2021 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河野 禎之
2. 発表標題 日本版大学プライド指標の作成について
3. 学会等名 大学ダイバーシティ・アライアンス 2020年度シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河野禎之
2. 発表標題 学際的・国際的視点からみたダイバーシティとインクルージョン：LGBTQを巡る今日的課題に焦点を当てて
3. 学会等名 Tsukuba Global Science Week 2020（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河野禎之
2. 発表標題 大学におけるLGBT等の学生対応の実際
3. 学会等名 全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会研究集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 河野禎之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 茨城新聞	5. 総ページ数 1
3. 書名 自分見つけめ出会い感謝	

1. 著者名 河野禎之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 茨城新聞	5. 総ページ数 1
3. 書名 「平等」と「公平」の内実	

1. 著者名 河野禎之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 茨城新聞	5. 総ページ数 1
3. 書名 自分事と考える大切さ	

1. 著者名 河野禎之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 茨城新聞	5. 総ページ数 1
3. 書名 「外見」超え相手を知る	

1. 著者名 河野禎之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 茨城新聞	5. 総ページ数 1
3. 書名 互いの「物差し」足して	

1. 著者名 河野禎之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 茨城新聞	5. 総ページ数 1
3. 書名 「自分以外の存在」尊重（茨城新聞「茨城論壇」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------